

## 第73回「家の光文化賞」

# 受賞組合を訪ねて

「家の光文化賞」は、昭和24年に『家の光』創刊25周年記念事業として「農村文化の向上に特別顕著な成績をあげている農業協同組合を表彰し、その成果をあまねく農村に広め、農村文化向上への一助とする」ことを目的に制定されたものです。

以来72年間、延べ287組合を顕彰してきました。受賞組合は、それぞれの地域における農業協同組合の先駆的役割を果たしており、その活動はもとより「家の光文化賞」に対しても高く評価されております。

本年度、第73回「家の光文化賞」については、審査委員14名により、現地調査も含め、約3か月にわたる厳正な審査を実施した結果、3組合に決定しました。受賞した組合には、賞状ならびに正賞として床置時計一基、副賞として賞金が贈られます。あわせて「ブラジル・コチア産業組合中央会記念賞」が贈られます。



令和5年2月

一般社団法人 家の光協会

### 第73回「家の光文化賞」審査委員

東京農業大学	名誉教授	白石 正彦
九州大学	名誉教授	村田 武
京都大学	研究員	石田 正昭
立命館大学	教授	増田 佳昭
摂南大学	教授	北川 太一
立正大学	教授	北原 克宣
北海道大学大学院	准教授	小林 国之
全国農業協同組合中央会	常務理事	若松 仁嗣
全国農業協同組合連合会	代表理事専務	安田 忠孝
全国共済農業協同組合連合会	常務理事	近藤 修一
農林中央金庫	代表理事	八木 正展
家の光協会	代表理事専務	河地 尚之
家の光協会	常務理事	木下 春雄
家の光協会	常務理事	新美 健司

### 令和4年度「家の光文化賞促進賞」選定委員

京都大学	研究員	石田 正昭
立命館大学	教授	増田 佳昭
摂南大学	教授	北川 太一
家の光協会	代表理事専務	河地 尚之
家の光協会	常務理事	木下 春雄
家の光協会	常務理事	新美 健司



# 第73回「家の光文化賞」審査委員長審査講評

東京農業大学 名誉教授 白石正彦

ロシアのウクライナ侵攻と国連の機能減退で、人類は大きな危機を迎えている。

この新段階では、J A 綱領にも明示されている国際協同組合同盟（I C A）の定義・価値・原則を大切に、J A グループは各地域から「平和な生き方を願う対話活動」を世界の協同組員（10 億人）との共感の輪として広げる使命がある。

家の光文化賞は、J A 運動を担う組員・役職員に「平和な生き方を願う対話活動」を深化させる“教育文化活動”の新たな方向付けに存在意義があると思う。

第 1 回審査委員会は、10 月 27 日に埼玉県 J A さいたま、神奈川県 J A 相模原市、宮崎県 J A えびの市を現地調査の対象 J A とすることを決定し、その後、現地調査を実施した。

その結果は 12 月 5 日の第 2 回審査委員会に報告され、厳正な審査を経て、3 つの J A を第 73 回家の光文化賞受賞候補とすることを決め、12 月 21 日に家の光協会の理事会で決定された。



埼玉県 J A さいたまは、審査講評として以下の点に注目し、高く評価したい。



J A さいたまの現地調査を報告した  
北原 克宣 審査委員

第 1 に、当 J A 管内は都心から 15km の首都圏に位置し、9 市 1 町で県内人口（733 万人）の約 4 割が住んでいる地域である。J A 組員戸数は 4.6 万戸（うち正組員戸数 1.5 万戸）、正准組員計 5.9 万人（うち正組員比率 31%）、耕作面積は約 5 千 ha 弱で、多様な都市農業やカントリーエレベーターが稼働する農村地域に立地している。

第 2 に、当 J A の管理運営面では組織基盤強化の新規プロジェクトに、さまざまな部署の係長以下の若手・中堅職員約 30 名の「J A N P」を発足させ、アクティブ・メンバーシップと職場の活性化に成果を上げており、広域合併 6 年目の課題を若手・中堅発議で改善するモデルとして高く評価する。

第3に、営農経済面では、さいたま市以南と以北の地域の各個性を引き出す総合JAらしい南・中・北の3つの地域統括部を結集軸として営農経済センターが配置され、共通課題では①農業後継者をはじめ、組合員子弟の婚活支援活動、②TACの訪問活動による濃密な支援、③人工衛星を活用したクラウド型営農支援による刈り取り時期判断等のスマート農業サービス、④JA商標登録の「黄金の雫」(梨)を使用した「黄金の雫梨グミ」や「大豆コーヒーロールケーキ」の開発・ブランド化、⑤JA直売所への新生産履歴システムの導入で直販額は21.9億円(JA全体の販売額は29億円)の地産地消の取り組みを高く評価する。

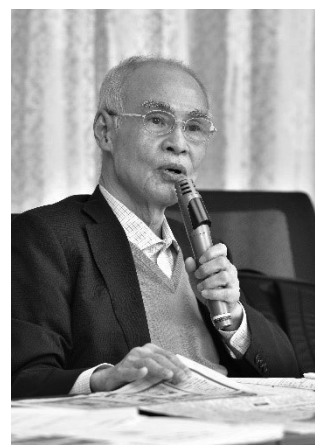
第4に、管内小学生を対象とした「夏休みこども村」を実施し、収穫体験や食の加工体験を、『ちゃぐりん』をテキストに学習し、自由研究に役立てられているなどワクワクした活動を評価する。

第5に、女性組織(フレッシュミズ含む)は料理講習会、人形づくり講習会、直売所視察等を開催、家の光記事活用グループ活動や女性大学の中部・南部・北部での開催など誇りをもった教育文化活動を高く評価する。

#### 神奈川県JA相模原市は、以下の点に注目し、高く評価したい。

第1に、当JAは2010(平成22)年に政令指定都市に移行した相模原市のうち旧相模原市地域を区域とし、JA管内人口は66万人である。管内をJR横浜線、JR相模線、京王線、小田急線が走っていて、東京・横浜へのアクセスが便利で、組合員は3万人であるが、正組合員比率は13%となっている。都市化地域ではあるが、なだらかな河岸段丘の相模川左岸沿いを中心に稲作が行われ、720haの農地面積が維持されている。都市化とともに集落組織では混住化が進んでいるが、注目すべきは、その集落組織を正組合員と准組合員を包含した“みどり組合”へと転換し、正・准組合員が一緒になって「農のある暮らし」の価値を大切にする地域活動を展開するとともに、多彩な教育文化活動や信用共済事業に結集していることである。これは他JAではみられない独創的な取り組みであり、高く評価する。

第2に、JAの管理運営面では、専務直轄で若手職員中心のプロジェクト「協同活動研究会」を立ち上げ、その研究・提案活動の成果をJA運営に生かしている点を評価する。



JA相模原市の現地調査を報告した  
石田 正昭 審査委員

第3に、営農経済面では、①当JAと相模原市が連携して取り組んでいる「援農システム」の一環として「農業研修講座」を長年続けており、これまでに約650人もの地域住民が修了し、農家支援を開始している。②農業研修講座の修了生たちが「NPO法人 援農さがみはら」を組織化する一方、人手不足の農家はJA経由で登録の援農ボランティアによる農作業を依頼している。③当JAでは、生産コストの低減、農作業の省力化のために他JAに先駆けて1992（平成4）年から組合員への農機具の貸出をスタートし、2021（令和3）年度は25種類36台の農機具について約1,000件の貸出実績をあげた。その成果は農産物販売額6億円（うち農産物直売所「ベジたべーな」は2.8億円）に結実している。こうした手厚い地域農業支援を高く評価する。

第4に、教育文化活動面では、①女性大学「和（なごみ）カレッジ」を開設し、地域住民のうち20歳代から55歳までの年齢層の教育研修を実施し、その成果はOG会の組織化への取り組みにつながっている。②女性会の女性教室では『家の光』を教本に「生米パン」を統一品目に掲げて調理実習を行っている。③家の光記事活用グループの活発な活動とともに、④当JAが相模原市の「さがみはらSDGs」に登録し、フードドライブや支援物資の寄付活動などを行っている。これらの多彩な活動を高く評価する。

**宮崎県JAえびの市は、審査講評として以下の点に注目し、高く評価したい。**



JAえびの市の現地調査を報告した  
**村田 武 審査委員**

第1に、当JA管内は鹿児島県と熊本県に隣接した高原にあり、九州自動車道と宮崎自動車道のインターチェンジやJR肥薩線・吉都線が通るなどの交通の要衝にあり、一方で林野率が73%の山村で、耕地面積は3,590ha（12.7%）である。当JA管内の総戸数は8千戸に対して、正組合員戸数が27%、准組合員戸数が25%で、総世帯数の半分以上がJA組合員世帯である。

第2に、地域営農振興面では、①畜産クラスター事業を活用した当JAの和牛繁殖センターの設立等の支援で、和牛部会、肥育牛部会が活性化し、2021（令和3）年の子牛と肉牛の販売取扱額は32.5億円（当JA販売額の58%）、②道の駅（南九州の交通の要衝に立地）での販売品取扱額4.4億円（JA販売額の8%）を達成、③ピーマン部会は、宮崎県で初めてグローバルGAPの団体認証（県内3JAで構成）を取得、④加工用キャベツは、従来は段ボール出荷が主であったが、鉄コンテナ利用で環境にやさしく、出荷作業効率が1.5倍以上にアップし、段ボールの資材費は約4割削減につながった点を高く評価する。

第3に、教育文化活動面では、①農業経営者組織協議会（315名）の電算簿記活用の創意工夫が2021（令和3）年の県協議会会長賞の受賞、②青年部は当地域が米食味ランキングで連続して特A評価を受けている点を次世代につなぐために、市内小学生を対象の「お米学習教室」（田植え・稲刈り、収穫祭）などの開催、③女性部は「ゆめ講座」（一般も募集対象）の開催による、次世代や非農業者世帯から新規加入、④JA・市・市教育委員会共催の「田の神さあの里産業文化祭」、⑤家の光記事活用グループの15グループ（メンバー456名）の元気あふれる多彩な活動を高く評価する。

以上のように3つのJAは、教育文化活動（共感豊かな土壌づくり）に創意工夫がみなぎり、これを求心力とした総合JAの事業経営活動に斬新さがみられ、両者の相乗的なネットワークづくりは、全国のJAの“範”となっており、家の光文化賞JAにふさわしいと審査委員全員が判断した。

教育文化活動を大切にしたJAグループの協同組合モデルを「平和な生き方を願う対話運動」として深化させる国際的協同組合運動につなぎ、開花させることを祈念する。

令和4年度

## 「家の光文化賞促進賞」受賞組合

「JA教育文化活動が、JA運営の中に位置づけられ、総合的に取り組む姿勢が見られるJAを顕彰する」ことを目的とした「家の光文化賞促進賞」の審査もあわせて行われ、1JAが決定しました。受賞JAには賞状のほか副賞として賞金が贈られます。

京都府  
京都中央農業協同組合



代表理事組合長  
田村 義明

## 若い力を生かし、地域とともに成長する

報告者 立正大学 教授 北原 克宣

東大宮駅にほど近い本店は、幾何学的なデザインの建物である。年季の入った建物だが、デザインの古さは感じない。JAの原点ともいえる「地域」と「人」を大切にするJAらしい建物である。

本JAは、2016（平成28）年4月に6農協の広域合併により新JAとして誕生した。管内は南北48kmと長く、本店のあるさいたま市が中部、東京都に隣接する南部、全域に農業振興地域が設定されている北部と分かれており、都市的地帯から農業地帯まで多様である。



1階部分のピロティでは定期的に朝市が開催されるなどコミュニティをコンセプトに建築されているJA本店

この特徴を知るには、さいたま市近郊に出かけるとよい。現地を訪問した際、木崎支店（浦和区）から片柳コミュニティセンター（見沼区）に向かう途中、「第二産業道路」（県道）を一本隔てるだけで市街地から田園地帯へと風景は一変した。やや高台から畑越しに見る新都心の高層ビル群の光景に、都市と農村が併存する本JA管内の特徴が表れている。

### 若手と地域を大切にするJA

JAさいたまの魅力は、若手・中堅職員が生き生きとしていることである。本JAの行動指針「おもてなシンパシー」は、「おもてなし」の精神にもとづいて行動し、共感・共鳴（シンパシー）を広げようと考案されたもので、これを提案したのが「JANP」という若手・中堅職員による組織基盤プロジェクトチームである。

JANPは、合併にともなう「組合員の農協離れ」を心配する声を受けて設置された係長以下による組織である。第1期27人は、自薦と他薦により様々な部署から選出され、1年間で会議12回、分科会19回の検討を重ねた。この成果は、①行動指針の策定、②全役職員が参加する研修会（「自己改革決起大会」）、③准組合員向け情報誌『あぐり〜ん』の発行などに結実した。



タブレットを活用した「JANP」の会議

2期目からは、「アクティブ・メンバーシップ強化検討部会」と「職場の活性化検討部会」に分かれ、現在5期目に入っているが、若手の意見を汲み上げる風土が組織内に形成されしっかり根付いていることが、このJAの活力の源泉となっている。

もう1つの魅力は、JAと組合員をつなぐ支店運営協力委員会である。合併から2年後、同委員会を全支店（現在は52支店）に設置し、組合員とJAを結び付ける重要な役割を果たしている。地区選出理事、支部長（農家組合長）、総代、女性部代表、年金友の会代表などにより構成され、JA運営の現状を知る機会になるとともに、組合員からの要望や意見を汲み上げる場になっている。

また、委員会で協議して実施される支店協同活動には、1支店当たり10万円までの活動費が補助され、小中学生を対象とした食農教育、女性部との連携による地産地消イベント、青壮年部との連携による朝市の開催など活発な活動を支えている。こうした活動がJAと地域、組合員を結び付け、JAに対する信頼の醸成につながっている。



支店協同活動の一環として、組合員と協働してプランター栽培に取り組む  
（准組向け情報誌『あぐり〜ん』運動企画）

## 都市圏の立地を生かした地産地消と6次産業化

管内で生産される農産物は、12店舗ある直売所を通じて地場流通している。訪問した「木崎ぐるめ米ランド」は、管内で最大規模の直売所である。それだけに、生産者が持ち込む農産物は所定の棚には収まりきれないほどである。耕作放棄地を利用して減化学肥料で育てた小松菜、減農薬青パパイヤ、ロマネスコなど多彩な農産物が並ぶが、JAが買取販売を行う今摺り米、6次産業化により開発された商品、直売所内にある加工所で作られた団子なども売られ品揃えも豊富である。

訪問した日は平日であるにもかかわらず、開店と同時に60台近く停められる駐車場はほぼ満杯となり、都内ナンバーの高級車も数台見られた。「中部および南部地区は首都圏に近く1人当たり単価が高い」と聞いていたが合点がいった。

また、「黄金の零梨グミ」「大豆コーヒー」などの商品開発も盛んであり、「大豆コーヒーロールケーキ」は「第18回日本農業新聞一村逸品大賞」の優秀賞に選ばれている。



直売所に並ぶ「黄金の零梨グミ」



地域農業の担い手との対話を重視したTAC活動



## 充実する広報・教育文化活動

清水節男代表理事組合長が強調するのは、広報活動の重要性である。広報活動を通じてJAの情報を発信し、これに共鳴してもらうことがJAファンの獲得につながると考えるからである。

とりわけ注目されるのは、准組合員向け情報誌『あぐり〜ん』である。准組合員への情報発信が不足していると感じたJANPの職員からの提案で実現したもので、送付する際に添付するハガキの1,000～2,000通ほどが戻り、多くの応援メッセージが寄せられているという。



年2回発行されている准組合員向け情報誌『あぐり〜ん』

教育文化活動も盛んである。その理由の一つとして、旧JAさいたま以来、女性部を大切にする伝統が組織として継承されてきたことが挙げられる。片柳支部で3年ぶりに開催された料理教室を見学した際、会場には女性部の会員7人のほか3人のJA職員がいた。職員3人が参加する手厚さに感心したが、エプロン姿の似合う男性職員が「支店長代理」だと聞いてさらに驚いた。支店長代理が女性部の担当を務めるのは珍しいことではないとのことだ。組織として女性部を大切にしていることがよく理解できた。

こうした日常的な努力が、女性部とJAとの信頼関係を築いている。女性部の牽引役でパワフルにその役をこなしているJA女性部連絡協議会の森操会長は、「優秀な事務局さんのおかげ」とたびたび口にする。JAへの信頼と親しみが伝わってくる言葉である。



女性部員と職員が一体になって開催される料理教室



女性部担当の支店長代理も参加

## おわりに

現地を訪問して印象に残った話題を2つ追加してレポートのまとめとしたい。1つは、木崎支店で聞いた話である。金融店舗となっている同支店は、先に紹介した「木崎ぐるめ米ランド」と駐車場をはさむかたちで建っている。ここに、「JAカードを持っていると割引となる」と聞いた直売所の買い物客が、口座を開設するために訪れることがあるという。直売所が地域の拠点となり、利用者を増やすことでJA事業にも反映される。まさに総合JAらしい好循環につながっている事例として印象に残った。

もう1つは、『家の光』等の普及とJAの諸活動をうまく結び付けている点である。JAさいたまは、第63回全国家の光大会（令和4年3月）において『家の光』高率普及実績表彰、『地上』愛読者拡大実績表彰を受賞している。この高普及率を支えているのが、『家の光』等へ掲載された活動の豊富さである。通信員が取り上げる支店協同活動などの情報は、JA広報誌ばかりでなく外部に提供するネタとしても価値があるものが多い。身近な情報がより多く掲載されるほど、組合員にも勧めやすく購読者も増える。支店を拠点とする組合員の諸活動と広報が一体化し、『家の光』等の購読につなげた好例といえる。

JAさいたまは、広域合併を契機に合併前の良いところを残しつつ新たな発想を加えて成長してきた。まだ課題は残るにせよ、さらなる飛躍が楽しみなJAである。



准組合員を対象にしたドライブラリーを実施するJANPメンバー

## 埼玉県さいたま農業協同組合

### JAデータ 令和3年度末

正組合員 18,513名  
准組合員 40,935名

### 普及状況 令和5年2月号

『家の光』 4,790部  
『地上』 159部  
『ちゃぐりん』 156部



代表理事組合長  
清水 節男



女性部連絡協議会  
会長 森 操



青壮年部連絡協議会  
会長 町田 英雄

# 「ありがとう」と「笑顔」あふれるJAをめざして

報告者 京都大学学術情報メディアセンター 研究員 石田 正昭

JA相模原市は行政合併前の旧相模原市を区域とし、地形的には相模野台地（「上段」という）と相模川段丘の上（「中段」という）、相模川段丘の下（「下段」という）からなる。都市化圧力の高まりは上段から始まったが、近年では農業中心地である下段にも広がっている。

しかし、総じて評価すれば、都市型JAの有利性をいかんなく発揮し、組合員をはじめ地域住民からも広く支持されている優良JAである。経営成績も優れ、内部留保も分厚い。その背景に役職員のあいだで共通ビジョン『「ありがとう」と「笑顔」あふれるJA相模原市』が共有されていることがあげられる。

## 「家の光文化賞」へのチャレンジ

現地調査の冒頭、小泉幸隆代表理事組合長から、本店ビルは2020（令和2）年2月に竣工したが、その直後にコロナ禍に見舞われたため、それ以降ここでは大勢の組合員が集まる機会をつくれていないと紹介された。

家の光文化賞へのチャレンジも、そのことと大きく関係している。「コロナ禍という事態をむしろ逆手にとって、JAの本来的な活動である地域活動を展開するうえで、各地域（各支店）の組織活動を徹底的に見直すとともに、確認しあう機会にしたかった」とその理由を述べた。



地域の拠点となっているJA相模原市本店

また、「その地域活動の展開にあたっては、『家の光』を教材として大いに利用させていただいた。その結果、少しずつではあるが、女性会活動を中心に地域活動を充実させることができている」と評した。これに続けて「こういう大きな賞をいただけたなら、そのことを広報することで、組合員だけでなく職員に対しても教育文化活動の意義を訴えることができる」と述べた。

本JAは2014（平成26）年度「家の光文化賞促進賞」を受賞しているが、それ以降少しずつ『家の光』の購読部数を増加させ、普及率は30%台を維持している。

## 地域活動の起点は「農業振興」にあり

都市型 J A ではあるものの、驚くほど「農業振興」に力を入れている。それはすなわち、地域活動の起点は「農業振興」にあることを教えている。それも昨日今日始まったことではなく、1963（昭和 38）年の J A 相模原市の発足以来の歴史のなかで構築されたものである。その拠点には「中段」の大沢地区におかれた「営農センター」にある。

たとえば、組合員の「農地を守る」取り組みとして農地中間管理事業（農地バンク）の一部業務受託があるが、これは 2009（平成 21）年創設の「農地利用集積円滑化事業」において、県内唯一の「円滑化団体」として認定されたことに始まる。

また、行政との連携により、一般市民を対象とする「農業研修講座」を開講し、援農ボランティア



地域住民を対象とした農業研修講座

を育成してきた。人手不足の農家は「農業研修講座」の卒業生で組織する「NPO 法人 援農さがみはら」に依頼し、援農ボランティアを派遣してもらう。この取り組みは、1995（平成 7）年の「認定農業者」制度導入 1 年前のアンケート調査で、担い手の最大の課題が「労働力の不足」にあることが判明したことから始まった。

このほか、営農センターによる農業支援は、育苗（水稻、さつまいも、キャベツ、ブロッコリーなど）、たい肥製造（牛ふんたい肥）、酪農ヘルパー（ヘルパー 2 人の雇用とヘルパー利用組合の組織化）、農機具の貸出し（トラクター、土壌消毒機、水田用機械などのレンタル）などに及ぶが、これらも長い歴史をもっている。



農業支援として実施している農機具貸出し

もう一つ、注目される取り組みは、農家組合（農業集落）を「みどり組合」に再編したことである。現在のみどり組合は 146 組合、4,316 人からなるが、そこには正組合員だけでなく准組合員も加入している。「J A 自己改革」の問題にも関連するが、J A を正・准組合員分断の構図ではなく、みどり組合のなかの正・准組合員融和の構図として捉えることに成功している。

## コロナ禍を跳ね返そう！青壮年部と女性会パワー

支店協同活動など、本 J A の地域活動における優れた特徴は、青壮年部と女性会リーダーの「若さ」「行動力・発信力」「発想の豊かさ」から引き出されていることにある。そのあふれるパワーは、J A との緊密な関係のなかから生まれた。両組織からの役員登用の途も確保されており、実際に活躍するリーダー

たちの意思が J A 運営に反映される仕組みをもっている。

青壮年部委員長の中島幸平さんは、フードドライブ活動や「かながわ旬菜ナビ（テレビ番組）」に出演したほか、「青壮年部 L I N E」の始動にも携わり、部員同士の対話促進に貢献している。青壮年部の特徴は、地区別「支部」だけではなく、作目別「部会」や若手農業者向け「みのり会」といった目的別組織化によって、重層的な部会構造を確立していることにある。



「みのり会」活動の様子

女性会活動では、旬の地場産野菜を使った「母ちゃん's kitchen」を開催するかたわら、その取り組みのなかから「親子クッキング」「男の料理教室」「女性会料理講習会」などを誕生させてきた。



毎回好評の「母ちゃん's kitchen」

コロナ禍のなかでいち早く活動を再開したのも女性会であった。たとえば、「母ちゃん's kitchen」の関連では旬の地場産野菜料理を J A ホームページに掲載したほか、過去の料理レシピを直売所「ベジたべーな」の来店者にパンフレットで紹介した。また、会員同士のつながりを保ちたいと考えて、会員へ向けて「笑顔咲かそうキャンペーン」の回覧を作成し、女性会活動報告を行った。

このほか、SDGs の関連では、市内の学生向け「フードバンク」への食材支援、DV 被害から女性を守る人権団体 NPO 「みずら」への支援物資の寄付、SDGs 活動を会員へ周知するための「缶バッジ・マスク」の作成などがあげられる。



市内の学生向け「フードバンク」への食材支援



『家の光』記事活用に取り組む女性会会員

女性会は 12 支部、1,004 人からなり、その加入率は対正組合員戸数比率で 30%、活動サークル数は 55 にのぼる。ここでは「ドライフラワーフレーム」づくりや「生米パン」づくりなど、『家の光』の記事活用も進んでいる。

## 地域活動をより豊かにするために

各支店の地域活動をより豊かにするための工夫にも言及しておきたい。

第1に、ボトムアップ型の支店協同活動を展開していることである。それも単なるボトムアップ型ではなく、支店運営委員会と本店運営委員会を併置し、支店運営委員会会長が本店運営委員会のメンバーに加わることによって、ボトムアップ・トップダウン双方向型の運営を可能にしていることに特徴がある。

第2に、教育文化活動の実施体制が整備されていることである。教育活動（役職員教育をのぞく）、広報活動、組合員育成活動（業種別組織をのぞく）、生活文化活動のいずれもが「組織相談部」のもとで一元的に管理されている。組織相談部は経営相談課と組織広報課からなるが、組織相談部次長と組織広報課長は女性である。

第3に、組合員との対話促進のなかで、支店で意欲的な取り組みが行われていることである。たとえば、相原支店では、管内の生産者からの委託品を支店「直売コーナー」で販売するという新業態を開発した。直売所から遠く、自動車をもたない高齢者に買い物の利便性を提供している。これこそ「JAだからこそできる支店サービス」ではないだろうか。



相原支店 直売コーナー

## 神奈川県相模原市農業協同組合

### JAデータ 令和3年度末

正組合員 3,853名  
准組合員 26,764名

### 普及状況 令和5年2月号

『家の光』 1,097部  
『地上』 62部  
『ちゃぐりん』 60部



代表理事組合長  
小泉 幸隆



女性会  
会長 志村 清美



青壮年部  
委員長 中島 幸平

## 元気な女性部と青年部が教育文化活動を担う

報告者 九州大学 名誉教授 村田 武

### 南九州のど真ん中・宮崎県を代表する米どころ

J A えびの市は 1978（昭和 53）年に、えびの市内（現在の人口は 1 万 6 千人）の 3 つの J A の合併で誕生している。南九州のど真ん中という遠隔地方小都市えびの市は、宮崎県の南西端にあって、豊かな水量の川内川が流れる市内の中心地の内陸盆地・加久藤盆地は、えびの市を宮崎県随一の米どころにしてきた。



地域住民の交流の場となっている  
えびの市交流物産館「道の駅えびの」

えびの市の市民 8092 戸のうち正組合員が 2196 戸（27.1%）、准組合員が 2043 戸（25.2%）、さらに年金友の会会員数は 4501 名と、J A えびの市は市民の過半数を組織している。職員数 206 名（うち臨時・パート 105 名）で、宮崎県下 13 J A のなかでは中規模農協である。2013（平成 25）年にはえびの市が開設した「道の駅えびの」の指定管理者になり、令和元年には県内初の「包括連携協定」をえびの市と締結した。自治体と二人三脚で、農林業を基幹産業とする地域をしっかりと支えている。

### えびの産ヒノヒカリが宮崎県悲願の「特A米」

平成 27 年産米の食味ランキング（日本穀物検定協会主催）で宮崎県下初の「特A米」に輝いた「えびの産ヒノヒカリ」は、令和 2 年産・3 年産でも連続して「特A」を獲得した。えびの市の水田が温度日較差に恵まれていることを生かし、J A 生産部会「稲作振興会」が 30 年以上も「稲作情報だより」を年 7 回も発行しての、土壌診断をはじめとする情報発信の努力が実ったものである。畜産農家が各戸でつくる牛ふん堆肥が、1200 ヘクタールの水稻作付け水田のほぼ全面積に



農家を次々に回って豊作を祈願する「田の神さあ」をデザインした「えびの産ヒノヒカリ」

わたって撒布されており、化学肥料はわずかに抑え、持続的な土づくりが行われてきたことも良食味米生産を支えている。ちなみに、ヒノヒカリは宮崎県農業試験場で平成元年に、コシヒカリと黄金晴との交配で育種した品種である。えびの市内の5小学校、4中学校の米飯給食（週4回）の全量がこの地元産米になっている。

水田の維持管理に力を発揮しているのが、農協出資子会社として2006（平成18）年に設立された「JAアグリランド田の神さぁ」である。担い手農家の農地管理が手一杯のなかで、とくに条件の悪い水田での稲作作業の受託で高齢農家を支えている。

### JAが管理する「道の駅えびの」が市民をつなぐ

「道の駅えびの」の直売所「結いの市」の出荷会員は320名を数え、小規模・高齢農家の生きがいづくりにつながっている。販売額が年間100万円を超える出荷者も相当数存在する。併設の地元食材を使ったバイキング食堂「えびのっ娘」が人気である。「えびのっ娘」で作られた弁当が、宮崎県立飯野高校の全生徒に提供されている。



休日は県内外から訪れる人々にぎわう直売所「結いの市」



地元産農畜産物を使った料理が人気の「えびのっ娘」のバイキング

### 青年部と女性部が食育活動をはじめ、教育文化活動を担う

青年部（部員67名・中村友哉部長）が、畜産部会（35名）、農産園芸部会（24名）に加えて、食育部会（50名）を10年ほど前から組織して活動している。1996（平成8）年に開始した「農家のおじちゃんと語る会」は、小学校5年生（4校で合計120～130名）を対象に、田植え前の5・6月の平日の午前中に農業施設（集荷場やイチゴ団地など）をバスツアーで見学するもので、約10名の青年部員が協力している。





子どもちに農業の楽しさを伝える青年部員



女性部と飯野高校（生活文化科）が  
コラボする産業祭

さらに青年部は、『ちゃぐりん』を活用した取り組みとしてえびの市・JAえびの市が主催する「米の食味コンクール」へ出品している。小学校4校すべて（各校が近くの水田を借りて栽培）と飯野高校（生活文化科）が参加する取り組みである。

女性部が元気である。『家の光』普及率30%の達成は、女性部の力によるところが大きい。「女性部の文化教室などいろんな場を活用して『家の光』の面白さを宣伝し、粘り強く説得した。これは『家の光』が好きな女性部だからこそできた」というのが松永亮子女性部長の声である。

女性部活動の拠点として「生活館夢工房」がある。その機能は、①女性部集会室、②女性部共同購入店舗、③味噌加工室である。2018（平成30）年から始めたという「ほおずき通信『かわら版』」は3～4か月ごとに張り替えられる手書きのかわら版である。



来店者が立ち止まる  
「ほおずき通信『かわら版』」

3支店と生活館夢工房、Aコープの2店舗に飾っている。作成者は女性部役員と3支部にそれぞれ3名の担当者がおり、女性部活動を生き生きと伝えている。味噌加工室を利用した味噌づくりは、女性部「おもと部会」（65歳以上）の高齢者3名が交替で指導しながら、2日がかりの作業である。各回5～6人で120kgの大豆（フクユタカ）を加工する。この味噌加工が准組合員を含む女性部活動の最大の取り組みであって、女性部長によれば、「味噌づくりが前提の女性部活動」だという。

J A えびの市は、この間のコロナ禍を乗り越えて、着実に地域農業を支え、明るい教育文化活動を通じて地域住民を励ましてきた。小吹敏博代表理事組合長を中心とするトップ・マネジメントの団結力があってこそ、女性部や青年部を励まし、教育文化活動で成果をあげることができたのだと考えられる。



「生活館夢工房」で味噌づくりを指導する  
おもと部会員



コロナ禍でも、対策を講じながら続けられた  
女性部の「家の光」記事活用

## 宮崎県えびの市農業協同組合

### J A データ 令和3年度末

正組合員 2,223 名

准組合員 2,244 名

### 普及状況 令和5年2月号

『家の光』 676 部

『地上』 54 部

『ちゃぐりん』 106 部



代表理事組合長  
小吹 敏博



女性部  
部長 松永 亮子



青年部  
部長 中村 友哉

## 家の光文化賞促進賞受賞農協一覧表

年度	都道府県名	農業協同組合名	年度	都道府県名	農業協同組合名	
平成13年度	埼玉県	くまがや	平成22年度	群馬県	北群渋川	
	滋賀県	東びわこ		神奈川県	セレサ川崎	
平成14年度	福島県	新ふくしま	平成23年度	石川県	小松市	
	岐阜県	東美濃		愛知県	あいち尾東	
	京都府	京都やましろ		愛知県	西三河	
平成15年度	岩手県	岩手中央	平成24年度	大阪府	北河内	
	新潟県	えちご上越		島根県	くにびき	
	三重県	伊賀北部		高知県	四万十	
	鳥取県	鳥取中央		秋田県	秋田しんせい	
	広島県	庄原		愛知県	あいち三河	
平成16年度	香川県	香川県	平成25年度	三重県	伊賀南部	
	埼玉県	いるま野		福岡県	筑前あさくら	
	静岡県	伊豆の国		長崎県	壱岐市	
	和歌山県	紀南		宮崎県	宮崎中央	
	島根県	雲南		東京都	東京むさし	
平成17年度	熊本県	球磨地域	平成26年度	静岡県	とびあ浜松	
	栃木県	はが野		愛知県	なごや	
平成18年度	佐賀県	佐城	平成27年度	岐阜県	西美濃	
	秋田県	秋田おぼこ		愛知県	尾張中央	
	広島県	福山市		京都府	京都丹の国	
	山口県	あぶらんど萩		島根県	石見銀山	
	福岡県	福岡市		福島県	白河	
平成19年度	熊本県	熊本宇城	平成28年度	神奈川県	相模原市	
	熊本県	あしきた		石川県	白山	
	宮崎県	はまゆう		愛知県	ひまわり	
	福島県	会津みなみ		島根県	西いわみ	
	京都府	京都市		宮崎県	えびの市	
平成20年度	大阪府	大阪南	平成29年度	宮城県	加美よつば	
	広島県	尾道市		東京都	東京中央	
	長崎県	長崎県央		神奈川県	さがみ	
	福島県	たむら		滋賀県	栗東市	
平成21年度	東京都	東京あおば	平成30年度	千葉県	市川市	
	京都府	京都		広島県	広島市	
	島根県	いわみ中央		広島県	佐伯中央	
	熊本県	菊池地域		鹿児島県	かごしま中央	
	埼玉県	さいたま		令和元年度	三重県	松阪
	神奈川県	厚木市			大阪府	大阪中河内
	静岡県	御殿場			大分県	べっぷ日出
	愛知県	あいち海部			神奈川県	神奈川つくい
令和2年度	愛知県	愛知東	令和3年度	三重県	伊賀ふるさと	
	大阪府	大阪市		鳥取県	鳥取いなば	
	広島県	広島北部		福岡県	福岡八女	
	徳島県	板野郡		福岡県	南筑後	
	愛媛県	東宇和		令和4年度	熊本県	八代地域
	宮崎県	延岡			京都府	京都中央

## 家の光文化賞受賞組合一覧表

都道府県名	農 業 協 同 組 合 名
北海道	女満別町(1)、ようてい[留寿都村(3)]、きたみらい[訓子府町(5)]、道北なよろ[風連(7)]、いわみざわ[大富(10)・岩見沢市(19)]、新篠津村(11)、峰延(13)、美瑛町(14)、芽室町(16)、あさひかわ[神居(17)]、鶴川(18)、南幌町(20)、道央 [江別市(26)]、ふらの[中富良野(28)]、そらち南[栗山町(31)]、土幌町(59)
青森	八戸[田子町(28)]
岩手	花巻(62)[湯口村(1)・湯本(6)・北上市(26)・花巻市(46)・花巻(54)]、岩手中央(61)[太田村(5)・岩手紫波町(41)・岩手中央(55)]、岩手ふるさと[金ヶ崎町(16)]、いわて平泉[一関市(17)・花泉町(20)]、新岩手[玉山村(29)]
宮城	新みやぎ[志波姫村(15)・小牛田町(27)・鹿島台町(42)・みどりの(49)・あさひな(50)・栗っこ(53)]、みやぎ仙南(69)[角田市(18)]、加美よつば(68)
秋田	秋田しんせい(66)[西目村(2)・小出(9)・金浦町(10)・上郷(25)・仁賀保町(28)]、秋田おぼこ(58) [千屋村(5)・高梨(23)]、秋田なまはげ[大正寺(26)]、あきた北(58)
山形	庄内みどり[中平田村(6)]、山形[本沢村(8)]、山形おきたま[上郷(14)・白鷹町(23)]、庄内たがわ[立川町(19)・新余目(44)]、鶴岡市(31)
福島	金津よつば[駒形(12)・金上(13)・会津坂下町(32)・猪苗代町(38)]、ふくしま未来[北福島(43)・新ふくしま(54)・新ふくしま(61)]、福島さくら[たむら(60)]
栃木	上都賀[今市地区(22)]、宇都宮[宇都宮市(28)]
群馬	前橋市[荒砥村(2)・前橋市(51)]
埼玉	いるま野(58)[入間市(23)・狭山市(25)]、さいたま(73) [さいたま (66)]
千葉	成田市[豊住(9)]、市川市 (70)
東京	東京むさし(65)
神奈川	横浜[横浜北(24)・横浜南(42)・横浜 (55)]、秦野市(25)、厚木市(62)、セレサ川崎(64)、さがみ (68)、相模原市 (73)
山梨	南アルプス市[桃園(12)]
長野	みなみ信州[市田村(1)・飯田中央(39)・信州いいた(47)]、大北(25)[北城村(3)・池田町会染(17)]、上伊那[美篤(11)・伊南(36)・伊那(41)]、ながの [飯山市太田(13)・山ノ内町平穂(30)・北信州みゆき(52)]、あづみ[烏川(14)]、松本ハイランド(55)[松本平(34)]
新潟	佐渡[新穂村(3)]、新潟かがやき[吉田町(29)]
富山	あおば[熊野村(3)]、いなば[松沢(4)]、となみ野[井波町山野(8)・鷹栖(11)・福野町(40)・砺波市(45)]、なんと[北野(9)]、みな穂[上原(10)・入善町(25)]、アルプス[立山町(21)]、福光[福光町中央(27)]、高岡市(57)[高岡市(36)]
石川	能登わかば[滝尾村(4)]、野々市[富奥(8)]、小松市(65)
福井	福井県 [社(13)・上中町(14)・鯖江市(22)・福井市(27)・三国町 (30)・大野市(38)・福井市(52)] 越前たけふ [武生市 (33)]
岐阜	めぐみの[蘇原(14)・可児(45)・美濃加茂(48)]、飛騨[清見村(19)・飛騨(49)]、西美濃[大垣市(37)]、ぎふ(69)[岐阜市(40)・岐阜市(55)]
静岡	遠州中央(56)[熊切村(1)・井通村(2)・富岡(11)・磐田市(26)]、清水[庵原村(4)]、三ヶ日町[三ヶ日町(18)]、静岡市(63)[静岡市(23)]、富士伊豆 [伊豆中央(24)]
愛知	あいち中央[安城市(34)]、あいち知多(59)[東知多(49)]、愛知東(62)、あいち尾東 (67)
三重	多気郡[明和町(21)]、伊賀ふるさと[阿山町(23)]、三重北[木曾岬村(24)]
滋賀	甲賀[竜池(2)・甲南町(7)・水口町(15)・甲賀郡 (51)]、北びわこ[湯田(4)]、東びわこ(54)、グリーン近江(56)
京都	京都[京北(19)・瑞穂町(24)・亀岡市(42)]、京都市 (64)、京都やましろ(66)
大阪	高槻市(55)、大阪中河内 (71)
兵庫	みのり[黒田庄(7)・上東条(12)]、たじま[出石(18)・豊岡市(27)・豊岡市(44)]、兵庫六甲[三田市(19)・神戸市西(23)・神戸市北(46)]、ハリマ(47)[一宮町(22)]、あわじ島[北阿万(24)]、兵庫みらい[加西市(26)]、兵庫西[上郡町(29)]、丹波ささやま[丹波(33)]、丹波ひかみ[水上町(35)]
奈良	奈良県(54)
和歌山	紀の里[粉河町(21)・紀の里(52)]、紀南(64)[紀南(45)]
鳥取	鳥取中央(58)[倉吉市(35)・東伯町(46)]、鳥取西部[江府町(43)]、鳥取いなば(72)
島根	島根県 (67) [海潮村(5)・大東町(16)・安来市(21)・出雲市(22)・島根石見(33)・斐川町(39)・いずも(56)・いわみ中央(61)・雲南(62)・石見銀山(65)]
岡山	岡山市[高松町(16)・西大寺(30)・岡山市(48)]
広島	尾道市[向東村(2)]、広島市[加計町(12)]、三次(48)[三次市(32)]、広島北部(64)
山口	山口県[深川(3)・田耕(7)・安下庄(9)・秋穂(18)・菊川町(21)・下関市(27)・山口市(36)・山口宇部(49)・豊関(53)・山口中央(63)]
徳島	阿南[桑野(9)・新野(11)]、徳島市(37)
香川	香川県[安田村(1)・宝山(24)・飯南(31)・三木町(44)・四国大川(48)・善通寺市(50)]
愛媛	松山市[余土村(6)・石井村(8)]、今治立花[立花(14)]、えひめ南(53)[喜佐方(15)]、うま[松柏(22)]、愛媛たいき[大洲市(32)]
高知	高知県[川北(10)・野市町(28)]、高知市(51)
福岡	田川 [田川市金川(5)]、筑前あさくら(63)[大福(11)]、にじ(53)[御幸(12)・田主丸町(25)・吉井町(30)]、久留米市(20)、筑紫(29)、宗像(37)、南筑後(72) 福岡八女[筑後市(41)]、糸島(51)、福岡市(58)
佐賀	伊万里市[大山村(4)・南波多(10)・伊万里市(24)]、佐賀県[南多久(6)・三日月村(15)・福富村(18)・武雄市(26)・白石地区(30)・杵島(34)・鳥栖基山(35)・鹿島市(43)・佐賀みどり(56)]、唐津[鏡(13)・唐津市(20)・上場(38)・松浦東部(47)]
長崎	長崎県央(59)
熊本	八代地域[金剛(6)]、菊池地域 (68) [泗水(8)]、熊本宇城[松橋町(29)]、球磨地域[錦町一武(30)]
大分	大分県[竹田市宮城(15)・臼杵市(16)]、大分大山町(39)
宮崎	日向[諸塚村(20)]、西都(40)、高千穂地区(50)、延岡 (67)、えびの市 (73)
鹿児島	南さつま[枕崎市(7)]、種子屋久[中種子町(17)]
沖縄	沖縄県[読谷村(17)]

(注) 1. ( )の数字は、「家の光文化賞」の回次 2. [ ]内は受賞時の農協名 3. 受賞農協合計158 4. のべ受賞農協数290